２００７年５月２日、６月６日

醤油を『むらさき』と言ういわれ

江戸前すし屋さんに行くと、醤油のことを『むらさき』と言います。

江戸時代に筑波山麓で大豆がたくさん産出され、美味しい醤油を江戸の方へ船で運んでいたのです。その頃、筑波山のことを『紫峰』と言っていたので、醤油が『紫峰』の方から運ばれて来るということから、醤油のことを『むらさき』と言うようになったとのことです。

以前から、筑波山のことをなぜ『紫峰』と呼ぶようになったか関心がありました。

筑波大学のスポーツの後援会が『紫峰会』と呼ばれているので、筑波大学出身の先生方に聞いてみましたがしっかりした解答が得られません。図書館で、百科辞典や地名辞典で調べても『筑波山のことを紫峰ともいう。』としか出ていません。また、万葉集に筑波山を詠んだ歌がたくさんあるので、それも調べてみましたが収穫がありませんでした。

途方に暮れていたとき、筑波山にまつわる万葉歌を研究されている方から、私費出版された冊子を戴きました。『神々の山－筑波山と万葉集』という本です。

その本の８６、８７ページに、次のように書かれていました。

松尾芭蕉(1644-94)が『鹿島紀行』の中で、愛弟子の一人であった服部嵐雪(1654-1707)の俳句を引用して、筑波山の美しさを誉め称えたのです。

その俳句は、

雪は申さず　まずむらさきの　つくばかな　（嵐雪）

で、「筑波山の雪景色が美しいことはいうまでもないが、それよりも、まず春たちそめるころの紫にかすんだ筑波山の姿は、また美しい。」と解釈してあり、この俳句が有名になって、以後筑波山のことを『むらさきの山』とか『紫山』、『紫峰』と呼ぶようになったと書いてありました。

これで胸につかえていたものがやっととれました。

なお、嵐雪は晩年、芭蕉門下に入り、芭蕉に絵を教えたそうです。

ついでに『鹿島紀行』のことを調べてみました。今から３００年程前、世は５代将軍綱吉(1646-1709)の時で、元禄文化はなやかな時代の１６８７年に、芭蕉が江戸から鹿島神宮を経由して潮来まで旅した紀行文です。途中、利根川を下る船を使っての旅だったそうです。そして、この２年後に『奥の細道』の旅に出たとのことです。

皆さんに伝えたいことは、ふと疑問に思ったことを、そのままにしないで、とことん調べてほしいということです。